

はしがき

2005年4月に刊行した第1次報告書では、NFRJ03の基礎的な集計結果を報告した。本書はそれに引き続く第2次報告書として、日本家族社会学会の会員有志が本格的に分析に着手した成果である。

本書には13編の論文を掲載している。執筆者は各自の関心に応じて仮説を立てデータに取り組んでいるので、あらかじめ一貫したテーマが設定されていたわけではない。集まった論文をテーマに応じてNo.1とNo.2の2分冊に分けた結果、本書には夫婦関係と世帯、ライフコースをテーマにした論文を収めている。とりわけ多いのが夫婦関係を扱った論文で、夫婦間の役割関係を取りあげているものが6本、結婚の質を問うものが3本と、13本中の9本を占めている。家族社会学の実証研究の中で関心が向けられているテーマの一つに、親子関係と並んで夫婦関係があることが裏付けられる。

ただし、夫婦関係と一言にいても、行動面、心理面、意識面のさまざまな角度からとらえられている。本書に収められている論文が扱っている夫婦関係も、行動面としての家庭内の役割分担、とくに家事、心理面としてのディストレスやコンフリクト、満足度などの主観的評価、意識面としての性別分業意識など、多岐にわたっている。

量的分析に関しても、多様な技法がみられる。分析目的に応じて採用する技法が決まってくるが、要因分析の場合はほぼいずれの論文も多変量アプローチを採用している。統計技法に関してもある程度の水準を共有することができつつあるのではないかと。また、近年散見するようになりつつある新たな分析技法を試みている論文も含まれている。家族研究における量的解析技法の洗練という点でも、NFRJがテスト場となっている意義は大きいであろう。

以下で、テーマごとに各論文を簡単に紹介しておく。

まず、大和、松田、松本の3本は、男性の家事参加を分析している。大和はそれを妻の側から、松田は夫の側から、松本は家計負担率との関連でとらえている。社会情勢の中でも男性の家事参加は注目されているが、研究の対象としてももっともホットな対象の一つになっていることがみとれる。

大和礼子「夫の家事・育児参加は妻の夫婦関係満足感を高めるか？—雇用不安定時代における家事・育児分担のゆくえ」は、妻の夫婦間満足感を用いて、夫の家事・育児分担を妻がどのように考えているのかを明らかにしている。育児期／非育児期というライフステージと妻の性役割意識、妻の収入貢献度に配慮しながら回帰分析を行ない、育児参加については妻から夫への期待が大きい、家事参加についてはそうとはいえないという結論を提示している。また、子どもが成長した後の非育児期には、NFRJ98では適格的であった衡平理論がNFRJ03では当てはまらないと指摘している。すなわち、男性の雇用が不安定化し妻の非正規労働者としての雇用が進むという社会情勢を背景に、妻の収入貢献度は高いが夫の家事参加は期待できない現状ゆえに、夫婦関係に満足であるのは性別役割に賛成の妻になるという。分析結果を踏まえて、今後の家事・育児のあり方に提言を行っており、家族社会学の洗練された研究スタイルの提示にもなっている。

松田茂樹「男性の家事参加の変化—NFRJ98、03を用いた分析—」は、同じく夫の家事参加を、男性の側からとらえている。NFRJ98からNFRJ03への変化を分析したところ、夫の家事参加が高ま

ったとはいえ、増加はわずかであったという。また、夫の家事参加の規定要因の tobit 分析の結果、家事参加を規定している要因の構造も大きくは変化していなかった。夫婦の労働時間は延び妻の収入割合は減っているが、夫婦の家事分担は短期間では変化しにくい構造であり、労働時間の延長によりむしろ夫婦はより分業する方向に向かいつつある可能性を指摘している。

松本訓枝「家計負担率からみた夫の家庭内役割分担の実態 — 育児期に着目して」は、夫の家計負担率によって彼らの家庭内における役割が異なるという仮説をたて、その実態を明らかにしようとしている。夫の家計負担率を7割で識別したところ、夫の家計負担率の高低と夫の家事・育児遂行と夫の家庭内でのジェンダー意識、妻の家事・育児評価、夫の結婚満足度とは関連していた。すなわち、共働きで夫の家計負担率が低い場合、家事・育児を多く遂行する。また、妻への家事・育児評価が低く、結婚満足度も低い。仮説どおり、夫の家計への貢献度によって、男性の家庭内役割に対する意識・態度が異なることを確かめている。

つづく妻と西村は、同じく男性の家庭内役割に着目しながらも、その関心の焦点は、男性の役割葛藤やコンフリクトに向けられている。妻は共働きの男性に限定して、役割葛藤とディストレスの関連をとりあげている。西村は男性だけでなく女性の側も含んで、ワーク・ファミリー・コンフリクトを扱っている。

妻智恵「共働き家族の男性における役割葛藤とディストレス—稼ぎ手役割意識と配偶者からの情緒的サポートによる緩衝効果—」は、共働き家庭の男性を対象に、彼らが経験する役割葛藤の影響をストレス論的アプローチから検討している。分析の結果、共働き家族の男性が経験する役割葛藤はディストレスに否定的な影響を及ぼすことを指摘し、今後は男性の多重役割状況にも目を向ける必要があると論じている。また、その役割葛藤の影響を、男性の稼ぎ手役割ではなく配偶者からの情緒的サポートが部分的に緩衝していた。共働きの男性が仕事と家庭を両立する過程で、配偶者からの情緒的なサポートが有用な資源であるが、しかもそれだけでは不十分だという結論に至っている。

西村純子「ライフステージ、ジェンダー、ワーク・ファミリー・コンフリクト —ワーク・ファミリー・コンフリクトの規定要因と生活の質との関連—」は、ワーク・ファミリー・コンフリクト (WFC/FWC) の発生頻度、規定要因、および生活満足度との関連を、特にライフステージと性による差異に着目して分析している。ワーク・ファミリー・コンフリクト自体、近年注目を集めている概念である。NFRJ03 には、仕事から家庭へのコンフリクトである WFC と、家庭から仕事へのコンフリクトの FWC を測定できる項目が含まれており、西村はこれを用いて広範に分析を行っている。具体的には、子どもの成長段階で設定したステージ別で WFC と FWC が男女でいかに異なっているかを指摘し、またそれが実際に担っているであろうケア役割と、ケア役割への期待によって変動していることを明らかにしている。さらに、WFC/FWC と生活満足度の関連から生活の質を問うている。

次に、結婚の質に着目した3つの論文を紹介する。小林、筒井、土倉の3者とも、結婚後の生活における質を問うている。小林は学歴の組み合わせから同類婚等の結婚タイプを設定した上で、そのタイプによる結婚の質の相違を分析している。筒井は結婚ならびに出産のタイミングをとらえた上で、タイミングによる結婚の質を検討している。土倉は学歴と収入を組み合わせた社会経済力と結婚の質との関連をとりあげている。3者ともに学歴との関連を俎上に上げている点でも興味深い。

小林淑恵「学歴下方婚のすすめ—類婚選択と実現された生活」は、夫婦の学歴から“同類婚”“伝

統婚（夫の学歴が上）” “非伝統婚（妻の学歴が上）” の3つにわけている。女性の高学歴化に伴い“非伝統婚”が多くなっていることを確認した上で、類婚タイプによって実現された生活を分析している。その結果、伝統婚では妻が無職である傾向が強く、その分、少ない所得でやり繰りしているが、夫婦双方が精神的には円満な生活を営んでいるようすがうかがえた。他方、非伝統婚では、就労意欲が高く実際に家計への貢献度が高い妻で、健康や精神面でマイナスの影響がうかがえた。

筒井淳也「結婚・出産タイミングはその後の結婚生活に影響を与えるか？」は、結婚タイミングならびに出産タイミングの動向を教育年数や世帯収入、子ども数との関連で把握している。分析結果からは、一般的な常識的理解とは異なる動向が指摘されている。一つには、学歴が低い社会階層で若年結婚が多いように思われているが、実際の教育年数と結婚年齢は単調な関係にはなく、同じ学歴の中でも多様化がすすんでいること。第二に、「できちゃった婚」は若年結婚だけの現象ではないことである。ついで、その結婚ならびに出産のタイミングがその後の結婚生活の質に与えている影響を検討し、若い世代では遅くに結婚して新婚期間が長い方が結婚の質が高いという結論を得ている。関連はわずかではあるが、理論的な関心を喚起する結果となっている。

土倉礼子「Educational Status and Income: Correlations with Subjective Evaluation of Marital Quality」も、学歴、年収、世帯収入という社会経済的地位と結婚の質との関連を問うている。土倉の分析によれば、夫が評価する結婚の質は、妻の場合より、学歴や年収に影響されるが、妻の評価は世帯収入によって左右される。いずれの年齢コーホートにおいてもこの傾向は変わらないという。この結果からは、性別分業の存在がうかがえる。ただし、妻の社会経済力が強いほど、ジェンダーによる差は小さくなる傾向にある。

次にあげるのは、性別分業意識に着目した2論文である。嶋崎は有配偶者の役割関係の枠組みでその意識を問うているのに対し、西野は親子間も含む意識の推移に焦点をあてている。

嶋崎尚子「男性の性別役割分業意識—家族関係・家族経験による形成過程—」は、48歳以下と若年の男性有配偶者とその比較対象となる女性有配偶者の性別役割分業意識を、育児役割や稼働役割も含めて多元的にとらえている。そして、その規定要因を分析していく中で、実態的な行動や経験が意識を規定しており、男性の性別役割分業意識が家庭の状況に適合的であることを明らかにしている。とりわけ、男性は家事への関与、女性は家計への関与という、広義の性別役割分業体制では想定されていない反対領域への参加度が「育児役割責任」を規定していると指摘している。

西野理子「家族意識の変動をめぐって—性別分業意識と親子同居意識にみる変化の分析—」は、性別分業意識の変動をNFRJ03とNFRJ98との比較により検討している。NFRJ03では女性の中高年齢層、男性の全年齢層において分業規範の弛緩化がみられるが、女性のそれは新規コーホートによって説明でき、男性の変動のみ時代の影響が示唆されると指摘している。ただし、意識と行動の一致度に着目して意識の質的变化にまで目を向けると、女性においても変化を認めることができると述べている。あわせて親子同居に関する意識についても同様の分析を行なっている。

NFRJ98からNFRJ03への大きな変更点の一つに、世帯表の導入がある。世帯表によって世帯範囲を問うのにもない、“一時的に別居している世帯員”という概念が生起する。稲葉昭英「一時的別居世帯員の構造」は、この“一時的別居世帯員”を分析している。調査の結果、全体の1割強が“別居世帯員”がいると答え、その多くは20歳代前半で進学・就職のために別居を開始した者たちであった。対象者らは、子の学校卒業・就職、経済的自立、結婚といったライフコース上の移行に

よって、一時的別居から別世帯へと子の位置づけに関する認識を変えているようだが、その分岐を決定付けているのは結婚であった。つまり、子の結婚は一時的な別居ではなく恒久的なもののみなされていた。さらに、別居世帯員を考慮した場合の世帯構成パターンと世帯の経済指標を検討し、別居世帯員を測定する積極的な意味を確認している。

最後の2論文は、女性のライフコースをテーマにしている。

福田亘孝「ライフ・コースは多様化しているか? : 最適マッチング法によるライフ・コース分析」は、タイトルにあるとおり、最適マッチング法を用いて、女性のライフコースが多様化しているのか、逆に標準化しているのかを検証している。最適マッチング法は、出来事の配列の分析技法であり、先行研究例はそれ程多くない。この新しい技法を活用することにより、若いコーホート、とくに1960年以降の出生コーホートで非標準型のライフコースが多くなり、多様化が進んでいることを確認している。さらに、その多様化は学歴ならびに職業によって格差があり、経済的自立性の高い高学歴女性ほど多様化が進んでいること、仕事と家庭を両立させるか否かによってライフコースの選択性に差が生じていることを明らかにしている。この結果は、女性の間での学歴や職歴の差が、ライフコースを選べる／選べないという二極化をももたらす可能性を示唆している。

福田が35～60歳の女性を対象にしていたのに対し、赤林英夫「NFRJ03・NFRJ98からみた丙午生まれのその後」は、丙午すなわち1966年生まれの女性を対象に分析している。丙午生まれの女性にはマイナスの迷信が注がれる一方で、コーホート規模が小さいゆえの有利さも予測され、他のコーホートとは異なるライフコースを歩んだ可能性がある。その実際を、まずは政府統計を用いて、ついでNFRJ98と03のプーリング・データを用いて検討したものである。教育水準、家庭環境、結婚確率、就業行動、配偶者、さらには結婚後の家事分業まで幅広く検討している。標本の規模が十分とはいえないが、個人の人生経験に関する詳細なデータを活用できるという、NFRJの特性を活かしたチャレンジングな分析である。

ほぼいずれの論文もNFRJ98とNFRJ03の双方に目を向けており、2000年を境とするこの5年間の社会情勢の変化の中での家族の変動を読み取ろうとしている。NFRJは家族関係に関する基本的な項目を備えた個票データを提供することを目的に実施されており、2度にわたるデータをこれで蓄積してきた。データの特性を活かした分析は、まだ手をつけられ始めたばかりである。本書が、さらなる学術的関心の高まりと実証研究の活性化につながることを期待したい。

編集担当 西野理子

稲葉昭英

嶋崎尚子